

Eureka V

六年制通信 No.27 平成 29 年 12 月 16 日 (土) 号

天の時は地の利に…

10 年ほど前に NHK で「天地人」という、直江兼続を描いた大河ドラマがありましたが、この「天地人」は孟子の言う「天の時は地の利に如かず、地の利は人の輪に如かず」からつけたものでしょうね。『孟子』は 14 の章句から成っていますが、そのうちの「公孫丑章句下」がこの言葉から始まっています。

普通、この言葉を辞書で引けば、例えば大辞林のように「天の与える好機は地理的な有利さには及ばず、地理的な有利さも人心の一致には及ばない」という解釈が載っていますが、原典では城攻めの話を例に出し、孟子はもっと具体的に語っています。『新釈漢文大系 4』を調べてみると、孟子の言うには、天の時には「天然自然の現象のその時々の変移や状態。たとえば四季・晴雨・寒暑・昼夜・方角など」を含んでおり、地の利は「土地の自然状態が都合よくなっていること。たとえば山河の險、城池の堅固さ」を含んでいます。原典を要約して紹介してみましよう。

天の時よりも地の利が大切で、それよりも人々の団結が大切だ。例えば城の周りを取り囲んで、長い間攻めても勝てなかったとする。これは攻めるに適した時があったはずなのに、それよりも城の堅固さ、すなわち地の利に及ばなかったからだ。また、城が城壁も高く周りの堀も深く食料も十分なのに落とされたとする。これは城を守る人の和がなかったからで、地の利は人の和には及ばない。

どうですか。私にはあまり説得力があるように思えませんが…。しかも今日の辞書に載っている意味から私たちが捉えるイメージと少し違っているような気がします。

孟子が言いたかった真意はどうあれ、長い年月をかけて私たちに都合よく変えられていったのかもしれない。もしそうだとすると、それが古典の運命と言えと言えらると思いますので、私たちには今日の辞書的な意味で十分ですね。

しかし私はこの辞書的な意味も、本当は逆ではないかと思っています。つまり「人の和は地の利に如かず、地の利は天の時に如かず」が正しいのではないかと思うのです。人の和は地の利には勝てない、地の利は天の時に勝てない、本当はそうなのではないかと思うのです。なぜなら、天の時は私たちの努力でどうなるものでもないのですから。ですから、これが最も強力で厄介な問題のほうです。例えば、織田信長でも豊臣秀吉でも、もしあの時代に生まれなかったら決して天下をとることはできなかったでしょう。信長や秀吉が江戸時代の、例えば元禄の時代に生まれたとしたら、これはもう絶対に天下をとれません。江戸時代の仕組みの中では誰が生まれたとしても、

その人の一生はその瞬間に決まっているのですから、秀吉にいたっては武士にすらなっていないことでしょう。信長たちにとっての「天の時」彼らの生きたあの時代だったわけです。ですから、天の時を大きくとらえ、いつの時代に生まれたかを問題にするなら、これはもう私たちの運命としか言いようのないことでしょう。

地の利も、これも普通私たちの努力で克服するのは難しいことです。日本が火山の国であること、地震の国であること、これらは地の利というか不利の方ですけど、私たちにはどうすることもできません。もちろん変えられるレベルのこともありますね。例えば鉄鉱石の貿易などが有名で、大陸内に工場を作ってしまうと鉄道で運ぶしかなくなるわけですが、そうすると一度に運べる量はたかが知れています。国際競争には勝てません。しかし港を整備して工場を作り船で運べるようにしたら何とか戦えるようになったとか、そういう解消できることも確かにあります。ですが、普通地の利はやはり私たちの力を越えている場合が多いと思います。しかし人の和は、私たちの工夫で何とでもなるものです。人の和より地の利、地の利より天の時の方が圧倒的であると私を感じるのもそういうことです。

さて、これらを今の君たちを当てはめて考えると、「天の時」即ち好機とは何か、「地の利」即ち自分の立つ場所はどこか、「人の和」即ち誰と手を携えるのか、という問題になりそうですね。平たく言うと「いつやるか」「どこで生きるか」「誰と手を組むか」くらいでしょうか。もちろん、君たちはまだ学業の基礎を固めている修行の身ですから、社会に出て何か心から挑みたいものが見つかったとき、本当の「いつやるか」が問題になるのでしょうか。「いつやるか」はチャンスを逃すなと言い換えてもいいでしょうから、今から心構えとしては覚えておいていいと思います。「どこで生きるか」は何に挑むかによって変わりますね。今の君たちは、それこそ行きたいところに行けるわけですから、やりたいことを追いかけていけば自然と自分の活躍する場所を見つけることができるでしょう。

人の和は、私たちの力で作れるものです。一つ論語の言葉を紹介しましょう。「徳は孤ならず、必ず隣有り」です。徳を備えた人間は決して孤立しない、必ず理解してくれる人、心を寄せる人ができるものだという意味です。徳を備えた人とは、非常に簡単に言うと、皆で何かを行う時に自分の都合を優先しない人だと私は思います。これがなかなか難しいのですがね。でもこの言葉も暗唱して損はないと思いますよ。

今週のおすすめ

・東海林さだお 『なんたって「ジョージ君」』 (文春文庫)

なんたって分厚い。1300 ページ越えです。単行本でも 800 ページ余りあります。東海林さだおは漫画家ですが、丸かじりシリーズなどを読むとエッセイストしても一流だと思います。とにかくとっても面白い。『なんたって…』にある「フタ」(瓶の蓋のフタね)の考察とか、岡潔訪問記などは絶品です。また、これはちくま文庫にあるはずですが、新漫画文学全集(全8冊)も大人の観賞に耐える面白い漫画だと思います。冬休みに読んでほしいけど、絶版でしょうかね。